第４学年　　総合的な学習の時間　学習指導案

橋本市立高野口小学校　　教諭　　中谷　栄作

１．単元名

「信太大好き！思い出の祭をとりもどそう！」

２．単元の目標

地域の自然や人々との関わりを通して、地域に伝わる祭の魅力や意味を理解する。そして、伝統的な祭について調べたり、自分たちの視点で地域を元気にするアイデアを出し合ったりしたオリジナルの祭を創り上げることで、地域への関心と愛着を深め、協働して社会参画する姿勢や思いを表現する力を育む。

３．対象

橋本市立高野口小学校　４年Ａ組２１名（男子１２名　女子９名　内特別支援３名）

４．単元について

【教材観１　信太（しのだ）とは】

信太とは、２０１８年に本校に統合された信太小学校区の地域名である。本校から北に５ｋｍほど登った山村であり、実は地図上には「信太」は存在せず、「信太神社」「信太区長会」の名称以外にその名前は使われていない。そんな忘れられた場所になりつつある地域について、４月に子どもたちが「信太って、どこ？だれもいない山なんじゃないの」とつぶやいた。本学級には信太からタクシーで通学している児童が２人いるのにも関わらず、その発言には何も言わなかった。みんな知らないのに、きっと知るほどの価値はないと思いこまれている地域、ふるさと学習を進める学校の取組の中でなかなか教材化されずふるさとに含まれていない地域、それが信太の現在地である。この地域に対する見方を変えることを通して、同じ地区だけど、違う地区として認識されている意識上の分断を統合していくことで、高野口地区についても見方が変わっていくだろうし、大きく見れば世界の見方も変わってくるだろう。また、消滅危機にある過疎地域は日本全国で見られることから、信太地区を元気づける学習をすることは、将来どんな地域に住んだとしても生かすことのできる学びがあるはずである。

【教材観２　祭とは】

祭は、地域とのつながりが密接であるため、歴史や意味、背景にある人々の願いや営みを知ることで、地域文化への関心や誇りが育てやすい。地域の方へのインタビューやプレゼンなどを通して、実社会とのつながりも体感できるため、自分たちの暮らす町を「学びの舞台」となり、学びのリアリティが高まるだろう。また、祭りを経験したことのない日本人はほとんどいないため、多くの人が懐かしい気持ちで活動にかかわってくれることが期待されるため、子どもたちの達成感も大きくなりやすく、ふるさと愛も高まりやすいと考えられる。

祭の企画・構成・演出において、子どもたちは自分の考えを形にする経験ができる。そこには発想力、構成力、造形力、発信力など、様々な表現活動が含まれるため、図工科や音楽科、国語科の学習と関連させやすい。合意形成の場面では学級活動の話し合い活動を積極的に取り入れ、道徳的価値をめぐる場合は道徳の時間を活用したりする。学習内容的には社会科の学習内容とつながる部分が多いことから、あらゆる教科学習とのつながりをもって授業を展開していけるだろう。

今回の祭の対象は一般社会であるため、様々なトラブルが必ず起きる。その時々に、協力しながら意見を出し合い、情報を集め、分析し、自分たちなりの解決策を導き出す過程において、探究的な思考が個人にも集団にも働く。本物を相手に、本物を作り、失敗も成功も含めて存分に味わうことが、チャレンジ精神や自己肯定感の向上につながるのである。

【児童観】

新しいことに出会うことが好きで好奇心の旺盛な子どもたちであるが、そこから問いを立てて探究したり、未知なことに挑戦したりする行動力に課題を感じる。また、合意形成をしてみんなで納得しながら進む際に安易に多数決で決めたり大人の言い分に従う傾向も強いため、我を出して自分たちの思いをつらぬくことが少ない。これらの根本には失敗するよりも敷かれたレールの上で成功を目指す方が、恥をかかないで済むという成果主義的な考え方があるだろう。そこで今回はじこを開放してほしい児童として、着目児を設定した。

	設定の理由	願う姿
A児	信太出身の男子。信太なんて出ていきたい、何もないところで暮らす苦労をみんな知らないんだとつぶやいていたA児が「信太の唯一のいい思い出は祭り」と言ったことでこの単元が始まっている。どんどん自己を開放しながら変容していく本児と、それによって影響を受ける他の児童やクラス、地域の変化を観察したい。	自分の生まれ育った村に誇りをもって「ぼくは信太出身だ」と語ってほしい。 また他者に対しても自信をもって関わり、学びや思いを発信することで自分の可能性を強く感じてほしい。
B児	学級委員になった男子。やんちゃで活発で意欲もあるが、自己肯定感についてはいつも低い回答をする。その理由を洞察するとともに、どうすれば自分を肯定できるようになるのかを探っていきたい。	自己嫌悪を努力のエネルギーに変えるか、自分のことが好きになるかして、自分にフタをするクセを取り去りたい。

【指導観】

本校の研究テーマである自己肯定感を高める３つの観点を指導の柱とする。一つ目は「自律」である。信太の祭づくりをすすめながら、課題にぶつかる度に祭の目的「きずなをふやし・感謝をふやし・歴史をつなぐ」や、学級目標である「やさしさ・勇気・よく考える」に立ち戻らせ、自己分析・自己決定がすることで自律心の向上を促す。そうして目的を自分事にすることで、一連の学習が終わった時に、自らの内的変遷を信太を介した自分らしい文脈で語ることができるだろう。

二つ目は「協働」である。信太の祭づくりを実現するためにあらゆる関係性を超越して対話を通して協力することで、信頼関係の大切さ、仲間としてつながることのよさを感じさせたい。特に世代や立場にこだわらず、広い視野に立って協働することができることを実感させるために、学校外の多様な専門家とつながり、目的達成のためにつながりをふやしていく中で主体的に協働する態度と礼節を学ばせたい。

三つ目は「利他」である。自分たちの感動をもとにして信太の人たちの「こまり感」を解決するべく、「だれかまかせ」を「自分たちにおまかせ」にして取り組ませたい。問題解決や目標達成の結果を具体的な人の笑顔を見ている自分自身として想像し、原動力にできる心が育てたい。

５．ＥＳＤとの関連

（１）<u>本学習で働かせるＥＳＤの視点（見方・考え方）</u>

有限性（限りがある）：　１．少子高齢化による集落・学校の持続不可能性

「自分たちの町・学校もいつかなくなるかも。どうにかしなくっちゃ…」

２．担い手不足による地域の伝統行事の持続不可能性

「楽しい伝統行事が魅力になって、すすんで地域を担う人が育っていく、今とは逆の考え方になるといいな」

「住民をふやすことは難しいので、まずは関係人口を増やすという考え方が大切そうだ」

相互性（関わり合っている：自然・産業・歴史が一つになって祭りに表れており、その地域の人のくらしに根差し関わり合っていること

「祭を守ることで、ただ集まるだけではなくて、いろんなものを大切にできるかもしれない」

連携性（力を合わせて）：多様な人の力を借りて祭りを実現していること

「自分たちだけでお祭りにはできなかった。ありがたいな。」

「信太のものだけで作り上げたいと思ったけど難しかった。だからいろんな町が協力しているのかな」

（２）本学習で育てたいＥＳＤの資質・能力

活動を進める中で立ち上がりそうなもので、かつ全体で熟議したくなるような対立軸としては次のようなものが考えられる。それらがＥＳＤの資質能力と対応させることで、効果的な学習機会になるようにしたい。

批判的に考える力＋多角的・総合的に考える力⇒伝統的な嵯峨谷の神踊りは、形を変えずにそのまま継承することと、形を変えてもっと参加してもらうことのどちらがよいか

未来像を予測して計画を立てる力＋進んで参加する態度⇒誰がこの祭りをこれから続けるか
誰がこの町のこれからを作るのか

（３）本学習で変容を促すＥＳＤの価値観

世代内の公正…どんな人が来ても楽しめる祭りにする。
世代間の公正…これまで信太をつないできた人たちがうれしくなる祭りにする。
幸福感に敏感になる、幸福感を重視する…ふるさとを守ることでうれしくなれる。

（４）達成が期待されるＳＤＧｓ

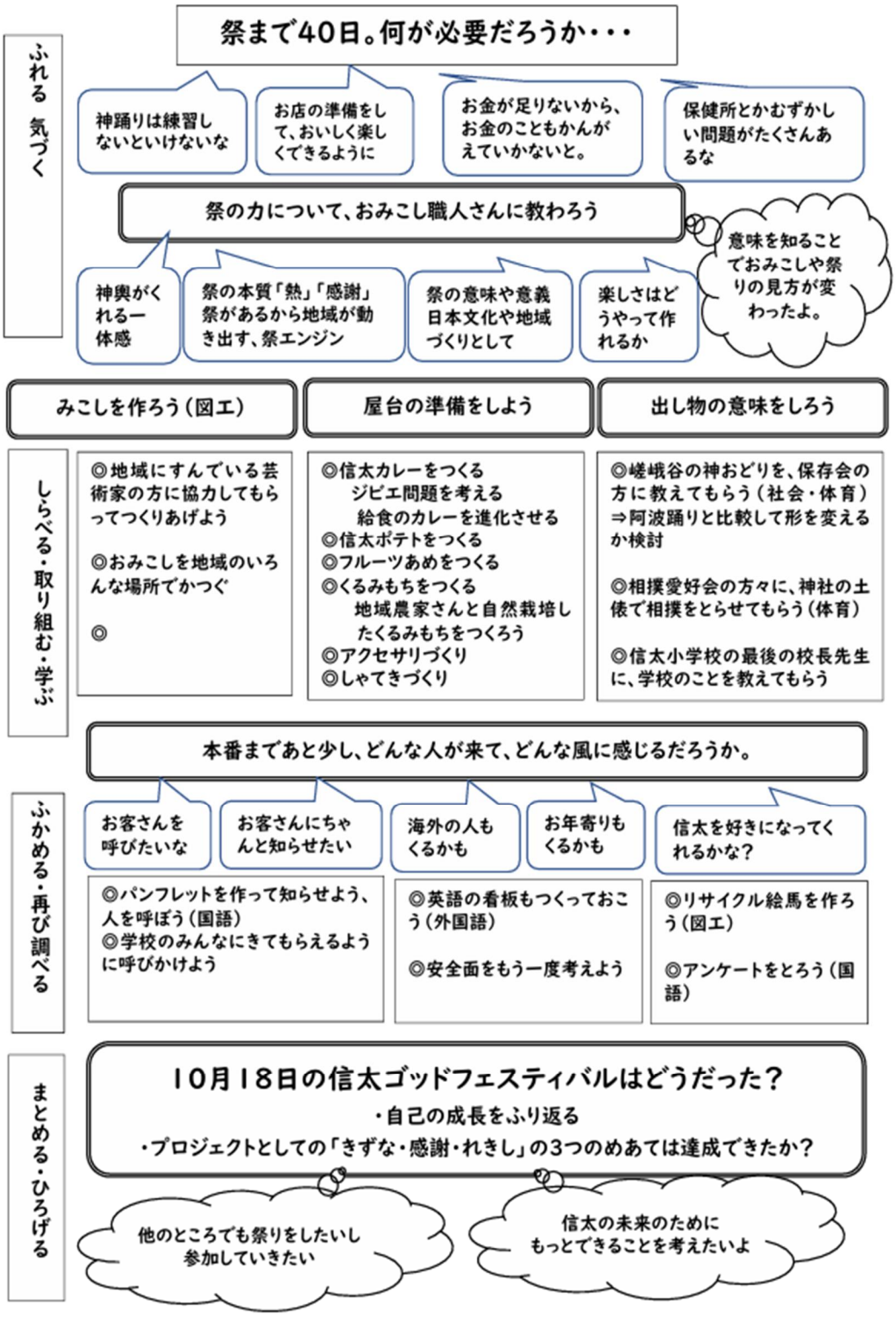
９　産業と技術革新の基盤をつくろう
１１　住み続けられるまちづくりを
１７　パートナーシップで目標を達成しよう

祭に地元食材を使用することで、地元の農業の活性化と、祭りによる集客効果が過疎化の解決につながるだろう。

６．単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に取り組む態度
地域の祭について、特徴や歴史を調べ、目的や意味を理解したうえで、自分たちが作る祭にこめる思いをもつことができる。	祭の目的に合わせて、祭をどうつくっていくかを自分事にして考え、作り方を工夫したり、内容を話し合ったりすることができる。	信太への愛着をもち、真剣に話す・聞く・つくる活動に取り組む姿勢がある。難題にぶつかっても、仲間と協力しながら、最後までねばり強く祭づくりに取り組んでいる。
伝統をつなぐことの重要性と課題について、多様な視点から理解することができる。	祭が自分にとって、地域にとって、どんな意味や価値があるか、来年も祭をするかどうかを自分の言葉で表現することができる。	祭づくりを通して「きずな・感謝・歴史」について学び感じたことを、これからの活動や生き方に生かそうとしている。

７．単元構想図（９月～１２月分　全２０時間）



※１２月には売り上げの４０００円を使って信太住民やゲストティーチャーなど祭関係者を招いての交流会を開催した。

８．単元の指導計画（実施した後で修正した実際のカリキュラム）

次	主な学習活動（GT 番号）	学習への支援	評価（△） 備考（・）
４ 月	・総合学習とは何か＋意識調査 ・まち歩き① ・信太ツアー②	メガネとスコップというキーワードで、子どもの感想を拾い上げる	△ア
５ 月	・今年の活動テーマを決める ・祭について調べる③ ・信太の良さについて調べる④ ・信太の方にインタビュー②⑤⑥（国語科と合科）		
６ 月	・信太に今も残るお祭りについて調べる ②⑦⑧（社会科と合科） ・つくりたい祭の内容を考える ・信太の方に祭りの内容をプレゼンし、可否を問う②	地域にとってもシビアな話題であるので、本気の対話になるようにお膳立てしすぎないようにする	△イ
７ 月	・他の過疎地域で祭はどうしているのか聞く⑨ （社会科と合科） **・祭の出し物をしぼりこむ（本時）** ・会場の下見にいく⑩ ・学校内の出し物を試してみる（学級活動と合科） ・地域の農家さんの農地を借りて、くるみ餅用のエダマメを植える⑪ ・祭の日程・担当者決め、夏休み明けの計画を立てる⑫ ・区長会に向けてのビデオメッセージを撮影する⑫		
８ 月	・嵯峨谷の神踊りに参加（０人でした） ・くるみもちづくり教室へ参加⑫（有志７人で放課後） ・祭のプロに話を聞く②⑭ ・お店の準備計画を立てる		
９ 月	・会場に使う信太小学校はなぜ閉校したのか、最後の校長先生から話を聞く⑮ ・祭の出し物である「すもう」について、今もすもうを続けている保存会の方に話を聞く⑯ ・出し物に必要な材料を仕入れる②⑤⑰⑱⑲ ・出し物の準備を進める②⑤（学級活動と合科） ・おみこしづくり（図工科と合科）⑳㉑ ・神踊りを教わる（体育と合科）⑧ ・祭を知らせるリーフレットを作る（国語科と合科）	プロジェクト型の学習を進め、自分たちで準備が進められるように支援する。	△ウ

次	主な学習活動（GT 番号）	学習への支援	評価（△） 備考（・）
10月	・祭のリハーサルをして、課題を見つける②㉒ ・本番に向けて修正をすすめる ・サニックスとリサイクル絵馬づくり㉓ ・地元ラジオ局から取材を受ける㉔ ・みこしを商店街の祭でかつぐ①（有志で休日に参加） ・祭本番②⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑯⑰⑲⑳㉑㉒㉓ ・祭をふり返る（きずな）㉔	アンケートをとって、子どもたちの達成感につなげる	△ウ △ア　イ
11月	・祭をふり返る（感謝）（歴史） ・地域の方から感謝状が届く② ・祭の意味を考え、自分の成長をまとめる ・売り上げの使い道を考える	外部からの評価コメントを生かす	△ア　イ
12月	・地域の人とのクリスマス会の準備を進める ・絵馬で地域活性プロジェクトの準備を進める㉕㉖		△ウ

GT①商工会議所の M さん
②信太の地域おこし協力隊のみなさん
③高野口商店街の昔を知る肉屋の HK さん（学校運営協議会）
④海洋学者の平井さん（うみわかまもるプロジェクト）
⑤保護者（学級の保護者がほとんど）
⑥信太の九重地区の住民の皆様
⑦信太の嵯峨谷地区の住民の皆様
⑧神踊り保存会の皆様
⑨川上村・東吉野村から、森と水の源流館の尾上さんと音楽科松谷さん
⑩シノダベース
⑪自然農法けんちゃんファーム
⑫橋本市役所シティプロモーション課
⑬信太地区婦人会の皆様
⑭横浜のおみこし職人　明日襷の宮田さん
⑮信太小学校　元校長Ｔさん
⑯隅田地区子ども相撲愛好会の皆様
⑰信太地区猟友会の皆様　⑱株式会社日本糧食様
⑲信太地区ふれあい市　⑳信太地区と２拠点生活をしている芸術家さん
㉑信太地区に移住してきた芸術家さん　㉒他の教員
㉓株式会社サニックス　㉔ＦＭはしもと
㉕高野口地区公民館　㉖近隣の商店

９．本時案

目標	祭りをよりよいものにするために、自分たちで決めた目的に立ち戻って 祭りの内容について話し合うことができる。	
	学習活動	・指導上の留意点 ◇評価（方法）
	１．食べ物と出し物に分ける ２．出し物をステージと屋台に分ける ３．【グループ活動】目的に合わせて、出し物を決めていく ※想定される対立：昔ながらのものが上位となり、自分たちがイメージしていた祭りとは違ってきたとき、「目的にはあっていなくても、これがしたい」という意見が立ち上がり、昔ながらの祭りにするのかどうかで対立が起こるだろう。 ※想定される対立：何個まで大丈夫なのか、と数にこだわる児童が出てくるだろう。その時には全体にその意見を発信させて、問いかけさせる。そのうえで「上位のものから実現できるようにする」という共通理解を得られるように合意形成をはかる。 ４．【フリー】ワールドカフェ形式で見て回る。 ５．【全体】納得できそうな意見について提案する。 ６．【個人】ふり返りと次への見通しをもたせる。	・話し合いが成立するようにはサポートするが、対立の解決は子どもたちに委ねる。また、こちらで意見の質について問いかけはしても、判定をしないように心がける。 ※声かけの中心 ・どの目的にあっているのか ・すべての目的にあっていないといけないかの ・組み合わせる必要なあるのか ◇自分なりのこだわりをもって学習に臨めているか。 ・この時間ですべて決定する必要はない ◇学んだことで意識は深まっているか

１０．成果と課題

（１）子どもの姿から

成果１：ワールドカフェの形式に即対応していた

伝えたいことが自分事になっており、普段から思ったことや学んだことを伝えることへの慣れが授業を支えている。こうして伝えることや、きいて質問すること、自分の意見を変容させることに慣れていると、どんな話し合い活動でも学びを得られるようになる。これは教科学習で得た技能を生かしているとも言えるだろう。

成果２：体験にもとづいて議論している

信太にはおじいさんたちが多いから、体育館のステージは思ったより高いから、など、出会った人、自分たちで現地にいって調べてきたことを根拠に話し合っていた。この授業自身も信太の方に「そんなにたくさんの出し物をすることはできない、もっとしぼるべきだ」とホンモノ体験が生きている。

成果３：めあてを大切にして議論できていた

「きずな・感謝・れきし」は、子どもたちと時間をかけて話し合って決めたものである。だからこそ話し合いの中で思い出しやすくなっている。こちらからあたえた目的と目標でなかったことで、自分で作ったものになったと思う。

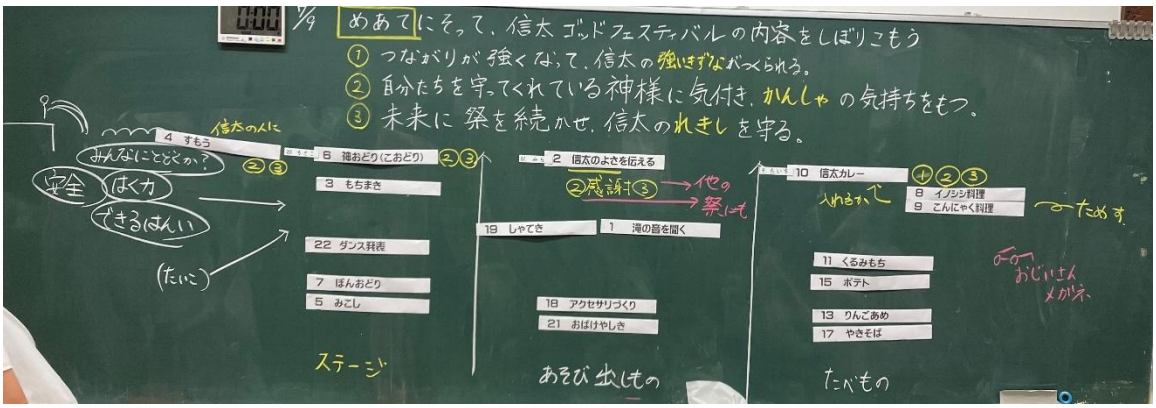
ゆえに、今後も大切にすべきことは豊かな体験を、こちらの計画もあるが、子どもたちの興味関心に沿って、味わいつくすくらいの時間を預けることである。そこから目標と目的をつくる過程で必然性と切実感をもって伝えあう姿は必ずうまれてくるのである。

課題１：感情でぶつかって話し合いきれない姿が見られる

課題２：意見を言わない児童にとっては黙って聞くだけの時間になる

課題３：体験の精選が必要ではないか

１、２については、話し合い活動を充実させていくことで改善すべきことがらであると感じる。３については、個人的には必要ないと感じる。子どもたちのやりたいことを大人が取捨選択することを脱却しなければ、子ども自身が自立して自己選択していく段階には至らない。これについても味わい尽くす時間を与えることが重要である。総合的な学習の時間では、それが可能である。だからこそ、総合的な学習の時間には、本物の思いや学びを生み出すと信じている。



（２）ＥＳＤの観点から

・本学習で働かせるＥＳＤの視点（見方・考え方）

有限性	祭がなくなっていた事実、祭を次年度続けるかどうかの話し合いを通して、有限性は強く意識できた。社会科の偉人の学習とつなげたことで、忘れ去られることは地域の誇りをなくしていくことである、という認識も生まれ、伝統・文化・歴史などその土地にしかないものを大切にする見方・考え方がはぐくまれた。
相互性 連携性	多くの方に関わってもらって祭を実現できたと子どもたちは肌で実感できている。ふり返りでは、すべてのものに感謝の気持ちをもつことで、見えないものが見えるようになる。それがきずなになって地域をつなげるのではないか、と子どもたちは考えるようになった。子どもたちの考える「神様」とは、そんな「目に見えないもの」だったのだと私は考えている。ただ、それによってふだんの生活場面において連携性が高まったかというと、そうとは言い切れない。腹の底から感じた感動体験をしても最後に十分に生活に還せなかった部分に課題を感じている。

・本学習で育てたいＥＳＤの資質・能力

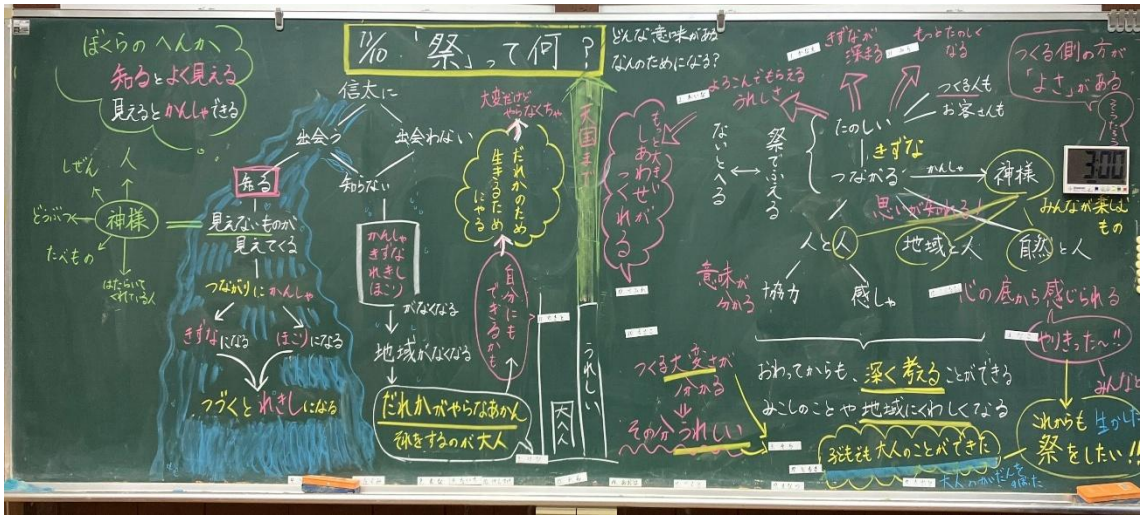
批判的に考える力＋多角的・総合的に考える力	未来像を予測して計画を立てる力＋進んで参加する態度
信太はもっと都会になった方がよいか、祭りはにぎやかなものがよいか、などの話し合いだけでなく、祭りの名前を決めたり出し物を絞ったりするときに、批判的な意見を出し合いながら、総合的な判断を下していく姿がたくさん見られた。 ただ、批判的な意見を好意的に受け取って傷つかずに議論できるだけの土壌を作れていないことが課題である。	祭が終わった直後、私たちがＢ児だけは「かなりしんどかったから、もうやりたくない」と話していた。しかし、ふり返りを経て祭りの意義を考えたとき「おれたちが未来の歴史に残さなくっちゃ」と発言し、有志での発表にも立候補して発表することができた。望む結果をイメージしたときに、まず自分からできることをしようとする態度が育った。

・本学習で変容を促すＥＳＤの価値観

世代内の公正・世代間の公正	幸福感に敏感になる、幸福感を重視する
きずな・感謝・歴史の３つのめあてで取組を進めてきたことで、世代内・世代間両方のつながりへの感謝や敬意を感じている児童が多くいる。	祭をやり遂げたことを「天国に届くくらいうれしい」と表現したり「人生が変わりました」と日記に書いたりする児童がいた。自分たちだけでうれしいよりも、利他的に誰かといっしょにうれしいことの方が、より幸せが増すことを実感できている。

（３）ふり返りから

資料１：祭とは何かについての話し合いの授業板書記録



①「祭＝みんなが楽しめるようにして、ちょっと疲れるけど、絆が深まるもの」

ぼくはアクセサリチームとも、お客さんとも、お手伝いしてくれた人ともきずなが深まったと思いました。ともきさんの弟をだっこして、いっしょにあそんでちょっとつかれたけど、ここでもきずなが深まったと思いました。そのあと別の祭りでは、ぼんおどりをしてみんなが楽しめるようにしていて、子どものためにお菓子まきもありました。

②「祭＝信太という存在を大切にするもの」

信太があってよかった。信太で生まれて、育ってよかった。自然いっぱいなのが私にとってよくて、これまで支えてくれた信太地区に感謝したい。それと、この信太という存在が私や４Ａの中で大切だと思ってもらえていることに感謝したい。私は信太が未来の歴史に残るように、もっと楽しく、安心できる信太にしたい。祭りは信太という存在を大切にできると思います。私は、今の祭を生かして、また先も祭りをしたり、いろいろ地区の事を学んで物知りになってこれからも生かすことを大切にしたい。祭とかに行くのもいいけど、それだけじゃなくて、「自分でつくる」ということを当たり前に考えられるようにしたいです。

③「祭＝たのしいもの＋喜んでもらえるもの＝もっと大きな幸せが作れるもの」

まおさん（信太住民）を見送った時、「大人でも４Ａの話し合いみたいに、しんどいことやしっぱいとかが、大きい幸せにつながることがあるよね」と言ってくれました。私たちは「大人の階段をのぼった」と思ったけど、大人でもまだ「おばあちゃんの階段」があるのかと思いました。まおさんは空き家をリフォームしてカフェにする取り組みをしているそうで、「自分のため」だけでなく「みんなのため、世界中の人のため」を思って取り組んでいるのがすてきでした。私も、まおさんのような心のやさしい人になりたいと思いました。祭っていろんなことが分かるんだな。祭とは何かを考えたとき、すてきな気づきがたくさんありました。

④「祭＝たくさんの思いがこもったもの」

祭りには作った人の思い、手伝った人の思い、いろんな人の思いがあって、意味がこめられている。昔のものや最近のものを使って、みんなで楽しんでうれしくなれるから、ご先祖様とか昔祭りをしてきた人の思いもこもっている。つまり、祭りには「思い」がたくさんあるということ。祭りに行く側メガネと作る側メガネをかけると明らかにちがいが分かる。私はちゃんと意味があったり、目的があったりしてやっているんだな、と考えられたから、メガネとスコップをたくさん使えた。自分たちはお客さんだと知れないことが知れた。

⑤「祭＝感謝ができる大人への階段をのぼるもの」　(B 児)

祭りは楽しまないと意味がない。どんなに店番がいても、お客さんがいないと意味がない。お客さんもお店の人に感謝する。だからみんなに感謝がわく。当たり前に感謝ができるようになると、やさしくなれて、お礼が言えるようになる。そんな人がふえたら、そこに来たい人がふえて、まちが元気になると思う。反対に祭りがなかったら、当たり前のことに感謝もしなくなってしまいます。だから祭は必要なものなので、これからおれらが感謝を大切にした祭りを続けたい。あと、大人は「たい度が大きい人」だと思っていたけど、祭りのふり返りをして、大人になるということは「心の大きい人」になることだと気づきました。

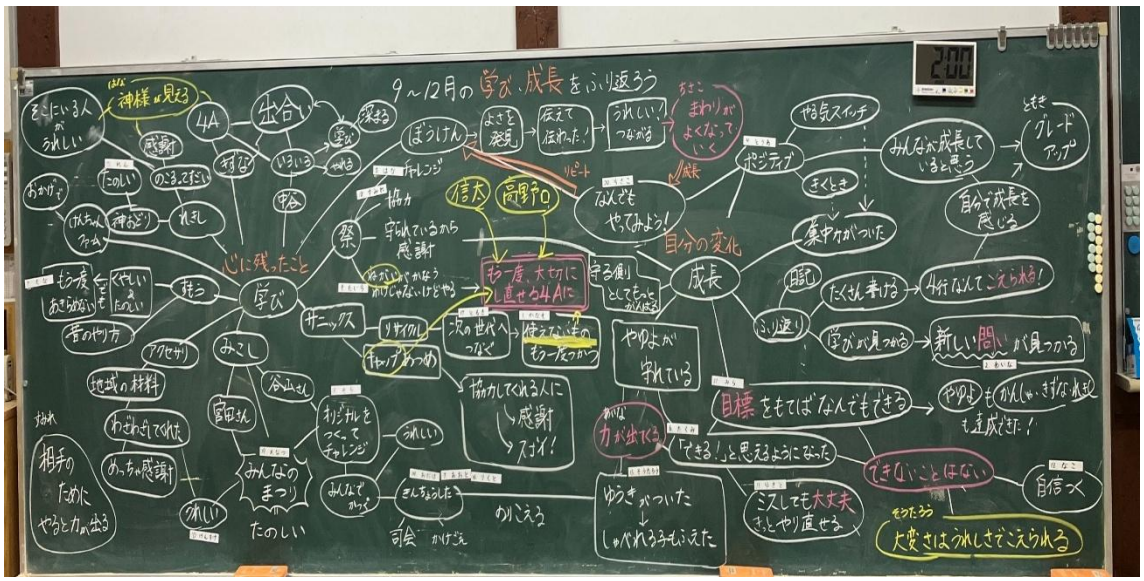
⑥「祭＝みんなで苦労してつくった川が集まった海のような、うれしい地域のあつまり」

祭りをして思ったのは「大変やけど楽しい！」やった。ただの祭りだと思っていたけど、おたがいにありがとうになれて、いつもの感覚とはちがった。楽しいだけじゃない、よく考えたら地域の集まりになっていると思った。これは全部まとめたら、友達が言っていた川や海につながると思った。みんなで「こたえ」を見つけていろいろ苦労してできた川みたいにつながったものだからです。そして苦労を重ねて「うれしい！」になったからです。

⑦「祭＝人とつながるもの」

祭りをして、作っている方がぜいたくをしていると感じました。作る側の方が、幸せで楽しくてうれしいと感じられたからです。私は、祭りの大きな目的は「人とつながる」だと思います。祭りは人とつながらないとできません。祭りのために来てくれた人ともつながります。同じように、世界では人とつながらないと生きていけません。そうならないために人と話したり協力したりするといいのですが、祭りがある地域ではそれができていると思いました。祭りがない地域では人見知りが多くなって協力も上手にできないだろうと思いました。つながるために祭りがあったら、強いきずながより早い時間でできると思います。

資料２：９月からの単元を通して学んだこと、成長できたことを出し合った授業板書記録



⑧ミスしても大丈夫！みんなでなんとかやり直せるから、大丈夫！

⑨目標をもてば、できないことなんてない！

　守られていることに感謝。守ってくれている人以上にがんばれる自分になりたい。

⑩大変さは、こえられる。うれしさで、こえられる。

　勇気が出せると、話せる相手が増えていく。

⑪感謝する私たちには、神様が見える

⑫信太を好きになって、好きを広めると、信太がよくなる。

　「ぼうけん」と「はっけん」のリピートでなんでも大切にできる。

⑬問いを見つけ、勉強とのきずなを結べるようになりたい。

⑭相手のためになることの方が、やる気が出る。

⑮負けるとくやしい。でも全力は楽しい。もう一度やりたくなる。

⑯絶対にかなうと決まっていなくても、がんばって続けているのは、すごいこと。

⑰（A 児）自分で自分をおうえんしてがんばって、グレードアップしたい。

　　サニックスは、未来の世代によいものをつなごうとしている。

資料３：信太とのクリスマス会の記録

⑱信太という土地に出会えてよかった。一つ、何かを見つけると、そこから深く考えて、お礼の会を作ることができた。わたしは、このことがスコップだと思う。メガネはスコップをしているときに、ちがう目線から見てみること。今日のクリスマス会でたくさんの人が来てくれてうれしい。それだけ私たちを大切にしてくれていると感じると、こっちも「もっと全力でがんばりたい」と思えた。それはなぜなのだろう。私は、最初は信太の事を「自然いっぱいなところ」と思っていたけど、そこからずっと信太にいて、その土地のよさに気づけた。そしてそのよさの「どこがいいか」を考えると、そのよさを作っている信太全

体が「あこがれ」ですばらしいものになった。でも、そのあこがれの土地がなくなりそうになっているなら、自分が守りたいと思う。そしてあこがれの先生のような信太の人や土地を、ずっとこのままじゃなくて、よさをもっと残したいと思う。
自分の「あこがれ」を友達に紹介して広めたい・・・それが私の今の思いだと思う。

小学４年

現在の学年終了時に目指す姿

オリジナルの祭を創り上げたことに自信をもち、「感謝・きずな・歴史」の視点から地域の伝統や人に関心と愛着を深め、協働して地域づくりに参画する姿勢や思いを表現する力のある児童。

総合的な学習の時間「信太にはなにもない？」

校区の一部であるのにほとんどの児童が行ったことも見たこともない「信太」地区を歩いて感動すると共に、過疎地域の持続不可能性に出会う。なにもかもなくなってしまいそうな地域であることから、今はなくなった祭を復活させようとする切実感を育む。祭づくりを通してたくさんの人に出会い実際に支えていただくことで、人のつながりが地域の宝であることにも気づく。

これまで守ってくれた人がいるから今この体験ができる。自分たちはなんてぜいたくなんだ。

社会科「地域に伝わる伝統行事」

無形文化財の嵯峨谷の神踊りをはじめ、みこし・すもう・もちまきなどを体験しながら学ぶ。始まりの理由、終わった理由、続けられている理由をひも解いていくことで、伝統の意味や価値を多様な視点から考え、伝統の価値を理解するとともに、これからのあり方について考える。

総合的な学習の時間「信太ゴッドフェスティバル」

〇主に養いたい ESD の資質・能力

批判的に考える力＋多角的・総合的に考える力

伝統的な嵯峨谷の神踊りは、形を変えずにそのまま継承することと、形を変えてもっと参加してもらうことのどちらがよいか

未来像を予測して計画を立てる力＋進んで参加する態度

誰がこの祭りをこれから続けるか

誰がこの町のこれからを作るのか

〇主に育てたい ESD の価値観

世代内の公正

どんな人が来ても楽しめる祭りにする。

世代間の公正

これまで信太をつないできた人たちがうれしくなる祭りにする。

好きを形にするって楽しいな。昔はもっと大きくて重かったのか、すごいなぁ。

相手に聞ける、相手に読んでもらえる、貴重な機会を生かせるように力をつけたいな。

国語科「信太の住民にインタビューしよう」

「信太のよさを伝えるパンフレットを作ろう」

祭づくりにあたって、住民の方々に信太のこと、祭りのことを一件一件インタビューしたり、祭にきた一般の方に信太のよさを知らせるためにパンフレットを作ったり、相手意識をもった「話す聞く活動」「書く活動」に取り組むことで、それぞれの力を育てる。

図画工作科「おみこしづくり」

参加した誰もがつながれる祭の中の「みこし」を、実際に自分たちがつくっていくことで、信太に対する思いや祭へのイメージを話し合いながら形にしていくことを目指す。木材や紙材を使い、色をぬったりかたどったりしながらみこしをかざりつけ、表現力を高める。